

連絡・情報 私たちの出番

アマチュア無線家、活躍中

通信網も大きな被害を受けた被災地に、全国のアマチュア無線家たちが集まっている。津波で壊れた中継局をカバーする装置を岩手県内に置き、「無線ボランティアセンター」をつくって、24時間態勢で情報をつないでいる。

「友人と連絡がとれません。どなたかわかりませんか」。ある夜、仙台市から無線が入った。「近いので行ってみてきましょう」。

応答した岩手県陸前高田市の無線家は、翌朝すぐ確認し連絡した。

「どこの道路が通れる?」と地元情報を求めるものや、「家が水浸しで家電製品が全滅。中古の洗濯機ありませんか?」と全国に呼びかけるものもある。

ボランティアの無線家たちが詰めるセンターは、同



病院の一室につくった無線ボランティアセンターで無線に応える岡崎さん(手前)と畠山さん(岩手県一関市、中山写す)

県一関市東山町のひがしま病院の一室にある。勤務医の岡崎宣夫さん(61)が呼びかけ、全国各地からボランティアが集まってきた。ベッドが二つ、炊飯器など自炊道具もそろう部屋で、交代で寝泊まりし、無線機の前に構えている。

岡崎さんは一関市内や盛

岡市の病院と診療所10カ所以上を結び、医療情報の受け渡しがオンラインでできる仕組みを作った経験を持つ。大震災時、「無線は一度に大勢に呼びかけられる。職業も違う、いろんな能力を持った人につながるのが強みだ」と考えた。

今月初め、中継機やア

ンテナを車に積み、東京から仲間がかけつけた。一関市の協力で室根山(標高895.5m)山頂の天文台に置かせてもらい、宮城県北や岩手県南はカバーできた。

メーカーは機器類を提供してくれ、日本アマチュア無線連盟は被災地の無線家に無線機を送る支援を始めた。沿岸は漁師が多く、無線の資格を持つ人が多いことにも期待がかかる。

高知市から来た畠山正則さん(72)はセンターに泊まり込んでいる。「私の地元でも南海地震が起きるかもしれない。ひとごとではないから」と言う。

中継局の周波数は439.44MHzヘルツ。同センターのコールサインはJE7Y YF、電話(0800・3539・7528)や、メール(8J1QJQ@gmail.com)でも問い合わせできる。(中山由美)